

2012年9月1日(土曜日)の朝日新聞に救缶鳥プロジェクトが掲載されました。

on Saturday
be

2 beランキング 「好きな丼」
暑さで食欲が出ない夏こそ、簡単でスタミナたっぷりの丼ものは重宝します。1位は「ガッツリ」食べたいときの定番でした。
売れ筋拝見 冷凍軽食
キミの名は ソフトサラダ

3 フロントランナー
サザエさんをさがして デヴィ夫人
帰ってきた食べテツの女
4 be report
「位置情報」新時代
再読ガイド 審判の眼
結婚未満 長友佐波子

5 週間テレビ 内村光良さん
番組表
(抜き取ってご利用ください)
7 逆風満帆 寺脇研国
9 はたらく気持ち
お金のミカタ 岩瀬大輔
山科まんが

10 be between 防災の備え
悩みのるつぼ 美輪明宏
いわせてもらお
11 てくの生活入門
ウィンドウズ操作の新基本国
ベルばらKids
ワンだふる! ニャンだふる!



フロントランナー Front Runner

シリーズはオレンジ、イチゴ、レーズンなど15種類の味がそろそろ。「パンの缶詰は私の5番目の子供です」=栃木県那須塩原市の「パン・アキモト」本社工場

飢え救う缶詰 世界に届ける

パン・アキモト社長 **秋元 義彦さん (59歳)**

「パンの缶詰」を、阪神大震災の被災者の声をヒントに開発した。昨年の東日本大震災で備蓄食へのニーズが一気に高まり、フル生産が続く。震災発生直後に1万5千缶を被災地へ提供し、以後も様々な支援活動を続ける。

この「パンの缶詰」を、飢餓や災害に苦しむアフリカ、シンパプエやハイチなど、14の国や地域に累計20万缶以上届けてきた。賞味期限3年のうち2年は購入者に備蓄してもらい、その後、義援先へ送る「救缶鳥プロジェクト」も、3年前から始まった。

「パンの缶詰」誕生のきっかけとなった1995年の阪神大震災。敬虔なクリスチャンだった父の「パン屋として応援できることをしよう」というかけ声で、すぐ約2千個

「救缶鳥プロジェクト」を着想したのは、缶詰を備蓄していた自治体担当者、1本の電話からだ。賞味期限が来た缶詰を処分して、「私たちがゴミを作っているのか」。パン職人として葛藤するなか、04年にインドネシアのスマトラ沖で地震が発生し、現地の知人から「売れ残ったパンでいいから送って欲しい」と要請が入る。そこで、納入したパンの缶詰を賞味期限切れ前に回収し、「必要とされる場所」に送るアイデアが浮かんだ。

自ら「根がやし馬」というだけに、アイデアを思いつくたびに、アイディアを思いつくたびに実行に移す。この夏には、自信作を海外にも広めるため、米・ロサンゼルスに現地法人を立ち上げた。

心に刻むのは、亡き父から受け継いだ言葉だ。「前例がないからこそやってみよう」

文・富森ひな子
写真・松本敏之

のパンを満載したトラックを仲間とリレー輸送し、2日後には被災地に届けた。

だが実際に食されたのは一部だけ。日が経つにつれ傷んだパンは廃棄処分となり、神戸で支援に取り組み男性牧師から「乾パンのように日持ちがして、焼きたてみたいにおいしいパンが欲しい」という被災者の声を聞いた。「ないなら作って」と牧師。新たなパン作りが始まった。

工場の片隅で終業後に行う試作は失敗続きだった。あきらめかけていたころ、近くの農産加工場で、タケノコを缶詰にする農家の女性たちの姿を見てひらめいた。パン種を入れて発酵させ、缶ごとオーブンで焼くことで殺菌し、長期保存できる方法を編み出し、1年かけて96年のような商品化にこぎつけた。

発売当初は低調だったが、2004年の新潟県中越地震で状況が一変。企業や自治体が援助物資として送ったパンの缶詰の映像がニュースで流れ、注目が殺到した。生産が追いつかなくなり、翌年、新たに沖繩に工場を稼働。昨年度は8年前の2.5倍の250万缶を生産、今年度は450万缶に達する見通しだ。

「夢に期日をつければ、それが目標になる」

フロントランナー Front Runner

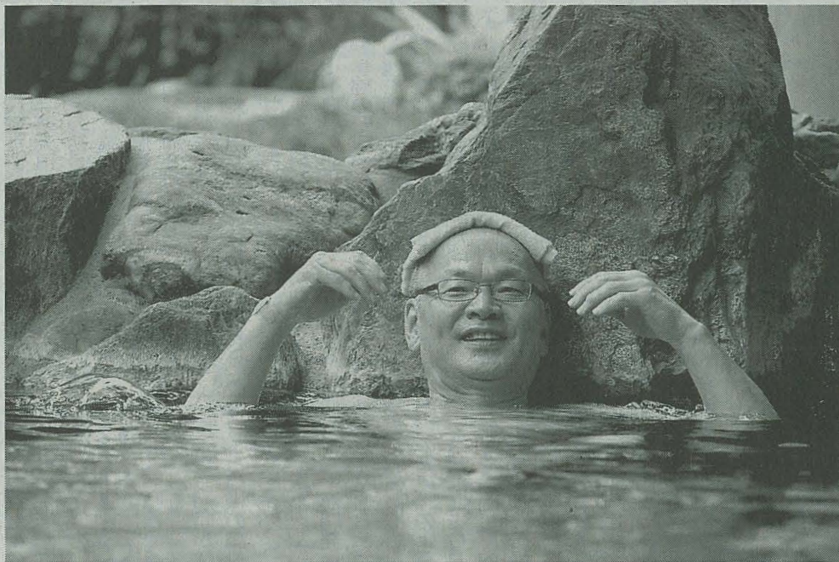
(b1面から続く)

秋元 義彦さん パン・アキモト社長

「次々とアイデアあふれる戦略を打ち出しています。特に「パンの缶詰」は斬新でした。パン屋のライバルは昔はパン屋でしたが、時代の流れが変わって、スナック菓子になり、ファストフードや弁当屋になり、いまではコンビニエンスストアです。「コンビニに行けば、パンでもおにぎりでも何でもそろいます。ダメは相当なものです。今の時代、パンの半製品を仕入れて、店内で発酵させて焼けば、そこそこの味が出るし、技術がなくても焼きたてならごまかせちゃつ。何も特徴がない、普通のパン屋で売っていくのは厳しいでしょう。生き残るためにはどんなことが求められるのでしょうか。危機感を持っていきます。特許を取っていても、コピー商品は出回ります。もし、大手や中堅企業

人々を救う

「救世鳥プロジェクト」が始まって3年になりました。どんなシステムですか。プロジェクトに参加すると、1



忙しい合間を縫って温泉につかる時間が発想の源—栃木県那須塩原市の千本松温泉で

「アキモトは違う」という世界にも通用する強みの一つが「救世鳥」です。NPOやNGO、運送会社などのタイアップがあって、初めて実現できる。金にものを言わせていただけはなし得ない、テックやネットワークが、我が社に築かれています。

要望を商機に

「今年7月には、市場調査のため、米国に現地法人を立ち上げたそうですね。」「パンの缶詰」を沖縄の米軍基地に納入した実績があり、2009年には宇宙飛行士・若田光一さんの希望品として、スペースシャトルに搭載されて宇宙にも行きました。そうした経験に加え、慈善事業に関心が高いアメリカでは、備蓄と国際貢献ができる「救世鳥」のようなシステムが受け入れられやすいと考えました。教会や企業などと連携し、どのようなネットワークを構築できるか、来

秋をメドに可能性を探りたい。——東日本大震災の支援でも、新たなアイデアが生まれています。

昨年の東日本大震災を機に、従来の支援物資の非効率な仕組みを根本的に変えようと、備蓄した支援物資をいち早く被災地に届けるNPO法人「災害支援機構 We Can」も立ち上げました。10万円を寄付を募り「パンの缶詰」や保存水、寝具などを購入して全国の倉庫に蓄えておき、有事の際には被災地へ直送し、一から集める手間と時間を省きます。

新しいことを始めるのは難しいことですが、それが相手の困りごとや要望だった場合は、大きなビジネスチャンスになる可能性があると思います。できないと思うのではなく、できるかもしれないと仮説を立てて取り組むことが大切です。「いつか」という夢に「期日」をつければ、それが「目標」になると信じています。

でも、もともとは家業を継ぐ気はなかったそうです。親の後ろ姿を見ていて、朝早く夜遅いとか、悪いところはわかり見えて。最後は祖母に説得されて、東京・永福町のパン屋に修業に行きました。全国から10人くらいでっか奉公に来ていたんですが、初日から「母ちゃん、こんなひどいところはねえ！」と、電話で泣きを入れてましたね。

学生のおおやじの影響で飛行機に乗りたいな、と。父は戦前から戦中、大日本航空(現JAL)で無線通信士として世界中を飛び回っていました。ところが墜落事故に遭い、障害を負ってしまった。そして「西欧化と食糧難イコールパン屋」と考え、脱サラして昭和22年に創業しました。新参者として苦労したようすが、人一倍勉強熱心でした。常に世界に目を向けて、僕たち子どもにも「世界を見よ」と言っていて、海外で遊学させてくれた。現状に満足せずチャレンジする姿勢を、おやじから学んだのです。

プロフィール



- ★1953年、栃木県黒磯町(現那須塩原市)生まれ。法政大学経営学部在学中から、父の勧めで世界各国を旅する。写真は大学3年ごろに、地元スーパーのインスタペーパーカーで。
- ★大学卒業後に東京のパン店で2年間修行し、78年に前身の「秋元ペーパー」入社、96年から現職。2000年に社名を「パン・アキモト」に変更する。注文が急増した05年、リスクヘッジのため西日本に製造拠点を求め、金融特区に指定されていた沖縄県で新工場の操業を開始。
- ★09年、「救世鳥プロジェクト」を開始。コンサル・企画会社「クオーターバック」の中島セイジ社長(57)が、缶のデザインなどを手がけた。中島社長は秋元さんについて「発想が豊かで、スピード感と経営者としてのセンスも抜群」と語る。
- ★「救世鳥」は約2食分入った15缶1セットで税込み1万2千円。2年で換算すると一月当たり500円で30食分ストックできる。
- ★常務を務める妻・志津子さんと長男信彦さん、次男輝彦さんが共に会社を支える。他に娘が2人。

◆今回は、社員7人の「小商い」ながらも、話題作を生み出し続ける出版社「ミシマ社」の代表、三島邦弘さんの予定です。